

令和5年10月 「はこでみ親の会」

「第23回はこでみ親の会」を開催しました。

今回のご相談の中で出た印象的な言葉は、

「普通になりたい」

という中学生の男の子の言葉です。

その男の子は、苦手なことがいくつかあり、現在の担任の先生との折り合いが悪いこともあり、不登校の状況が続いています。しかし、放課後等デイサービスや医療機関のショートケアなどではとても楽しく前向きに活動することが出来ています。また、ご家庭でもゲームの時間や寝る時間など親との約束を意識しながら自分で調整して過ごすことが出来ています。お母様の話を聞く中でもたくさん良い面を持っているお子さんであることが分かり、苦手な面を持ちつつも、そのお子さんなりに毎日一生懸命頑張っています。

そんなお子さん本人が、

「普通になりたい」と強く願っているのです。

この言葉を我々大人はどう捉えるべきでしょうか？

前向きな向上心からくる言葉なら応援するべきですが、自己否定からくる言葉なら早急に周りの大人の対応を改善するべきです。

そもそも「普通」の明確な概念なんて誰も分かりません。

そんな曖昧な誰も知らない「普通」を目指し、見えないボーダーラインを感じながら日々辛い思いをしているのは、あまりにも酷な話です。

仮に苦手なことの方が割合的に多く集団の中で立ち止まることが多くても、そのお子さんの良い面やマイペースでも前向きに取り組んでいる面を認め褒めてあげることで、その後の人生は大きく変わっていきます。

「普通になりたい」

この言葉をどう捉えていくかが我々支援者の大きなテーマだと強く感じました。

